

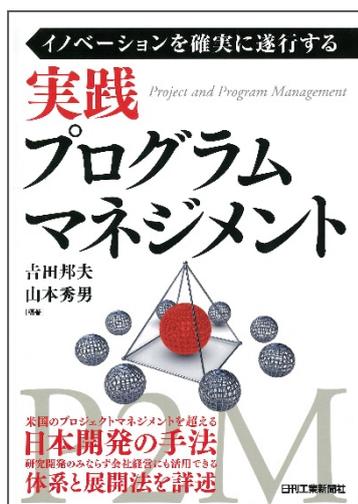
P 2 Mにおける実践技法の開発を期待する

一般社団 国際P 2 M学会会員 小原重信

はじめに

成熟国としての我が国は、高齢化に一億活躍時代、地域の若者離れ、国際化やデジタル時代の遅れなどに、知恵を結集する難しい解決策を求められている。P 2 Mは、プログラム計画と活動に共通な難題の壁に「込み入った構成、利害関係、読めないリスク、問題解決に広がる知識」などの特性への対応法を 15 年前に示している。そこで学会は会員に投稿の場を設け、有効な理論や知識を探求して、実践に利用できるいろいろな技法を開発してきた。そして、大学院と社会人の教育に実感できるツールを使って、能力向上に実績を残している。その期待をマガジンによる交流で会員に実践技法の開発にそのツボを示せば幸いである。

1. あるべき姿を描くと課題が見える： 実践技法になぜ注目するのか？



過去 10 年間に大阪大学大学院の工学と経済共催における「環境リスクマネジメント」に 3 年、東京農工大学大学院における技術経営、応用化学の後期博士課程、アジアアフリカの現場型環境リーダーの留学生向けの授業を体験した。そし

て、社会人や研究生が専門分野では優秀であるが、文系と理系のそれぞれの知識には疎く、関心が薄いことを実感した。吉田邦夫名誉会員と山本秀男会員による編著は、2015 年に「実践プログラムマネジメント」(日刊工業新聞社)発刊された。吉田会員が「まえがき」で示した「P 2 Mを一般教養にして欲しい」という言葉には、授業経験からの現場感覚にも通じ「なるほど」と共感した。さらに、山本秀男会員が同著のなかでP 2 Mガイドでのプログラム基盤で示した5つ目視点に「環境変化を先取できる速度で行動する」を「加速度に負けない5つの精神」とした見解が印象的である。この2つの教示を研究生や社会人に「分かりやすく実感できる」ためには実践技法に注目する必要があると感じた。その先鞭を切ったのは亀山秀雄会員が授業である。それは欧米の研究者による最新の「ロジックモデル」実践技法である。日本発にこだわらず先端知識を探求して、利用することも大切である。その効果は抜群であり、学会投稿数は、数年で2倍となった。また学会創設による発表と学位評価論文となる相乗効果は、P 2 M理論と実践を統合した独自の論文により、東京農工大学、名古屋工業大学、千葉工業大学などで、現在までに学位取得者を少なくとも 15 名以上輩出した実績で検証されている。

2. 国際標準に活動する：日本PM協会 と国際P 2 M学会の実績

P 2 Mガイドが開発され昨年で 16 年

を迎えた。そして、今後の海外の大学院教育における次世代リーダーの講演や人材育成の実績がアジアパシフィックに認知されてきた。日本PM協会の初期活動では、仏リール大学院、キエフ工科大学、シドニー工科大学、ロンドン大学にP2Mを発信し先導した実績が、ようやくグローバルに独自性を評価されるロンドン大学のモリス教授等の著書引用に結実している。さらに吉田会員や亀山会員が幹部を務める日本化学工学会が協賛し、工学系のASCONE（アジアにおける革新エネルギー、環境、化学工学を専門とする国際会議）にP2Mセッションが常設される国際的な場が設置されている。アジア有名大学である台湾大学、韓国のソウル大学やKAIST研究所、タイのチュラロンコン大学、中国計量大学院に関心も深まっている。それはP2Mがアジア文化と風土に調和する標準として東洋思想を色濃く反映しているからである。2014年の韓国で開催されたASCONE国際会議におけるセッション、2015年のベトナムホーチミン市工科大学共催の国際会議にも実績を挙げて、さらに2017年度3月中旬にはフィリピン最高峰で大統領と行政官僚、社長を輩出するフィリピン大学との共催国際会議の実施を推進している。日本型の独自発信により、学会はイノベーションを先導する産学官の連携でリーダーシップを発揮していることを会員にお伝えしたい。

3. 実践技法の開発のツボ : KJ法とロジックモデルの活用

実践技法開発のニーズと国際化における環境を理解したうえで、本題に移る。現代社会には「読み解き難題」が、多領

域に発生している。P2M教育で受講生が直面するのは「迷路にきっかけをつかめない」ことである。「あるべき姿を図でもキーワードをみつけてください」と伝えても難しい。そのような場合、まず優れた実践手法であるKJ法(川喜田二郎が発明した頭文字)を使い、チームをつくり「批判をしない原則で知恵を出す訓練」に慣れることがツボである。この手法のP2Mにおける絶版となっているが、拙著の「P2M入門」(H&I社)に学部学生の教材として分かりやすい。例えば、2001年当時グローバル化する大学を探る事例でP2MにおけるKJ法による「あるべき姿」の学生演習の結果を解説している。学部学生に将来の期待像に膨らまし、「あるべき姿」を言葉で表現しき「キーワード」における相互関係を「見える化」している。その実践技法は「すぐれもの」であり、現場、風土、知恵などソフトパワーとなる資源をKJ法により文化人類学視点で「分かる化」し体系的に発掘している。成果が見られれば、次の段階でプログラム計画と活動の前提を明らかにして、社会難題に解法を探る「ロジックモデル技法」を使うと、さらにワンステップ能力の向上を実感できる。このように「P2M技法の合わせ技」は、難しく言えば「姿勢技法」「創造技法」、「統合技法」に分類して解説する必要があるが、いずれも、創造技法を研究する学会用語である。この指針で研究することも本学会では、重要な研究領域である。



ホーチーミン市工科大学における討議風景

おほりに

P 2 Mイノベーションによる社会問題の解決が叫ばれて 20 年が経過した。ネット社会やスマホ経済がビジネス競争をさらに激変して「問題解決」による新たな「実践技法」が期待されている。本年の秋季大会では、アーキテクチャーマネジメントに Architect Jump 技法体系に価値デザインの窓を発表したので、会員には読んでほしい。